

第二十三軍香港第二〇〇兵站病院略歴

陸軍軍医大尉 龜山良一

年月日	概	要
昭一七二二九	香港陸軍病院創立、療院長以下自隊員約八〇〇名、收容患者数三千名	
二〇三、	九龍地区に本部あり、其の他才一、才二、才三、分室、香港島分院、香港島線々医療所、深圳救護班に於て業務を開始す	
四一	才二百兵站病院と改称	
八一五	才一半部広東に転進、東山地区に位置し療養所を束沙、黄浦、石龍、英徳に出し九龍にて才二半部業務続行	
三二一	終戦后才二十三軍命令により広東地区より再び香港地区に転進、才二半部と合併	
三二八	爾后九龍に於て才一区、才二区、才三区に分れ業務を続行、九月以降入院患者数四千五百	
	病院は才一区、才二区のみに縮小、合計八〇〇名、英船フォートバツファロ一号により九龍より出航	
	鹿兒島に上陸	
	鹿兒島上陸后患者中一二〇名、自隊員三名、計一二三名	
	軍事保護院、鹿兒島病院、河原分病棟に分院	

(299)

1339



第二十三軍第二百兵站病院患者護送班略歴

年 月 日	概 要
昭二〇・三・九	才二百兵站病院長矢野義徳軍医少将の命により護送員軍医大尉龜山良一以下二百名を以て独歩患者六〇名へ内訳、陸軍関係五六名、海軍関係四〇名を内地病院に護送のため内地帰還を命ぜらる
一三・二	英船フオートバツファロー丸に香港より乗船
一三・二	航海中、独歩患者十人により死傷及事故なし
一三・八	鹿児島に上陸
	上陸後海軍関係は海軍側に引渡し完了。陸軍側は入院を要すべきもの一二三名、国立鹿児島病院に入院、其他残務整理者二名の他何れも十八日午後五時五十八分発列車に依り除隊、召集解除、帰郷す
	残務整理者 軍医大尉 龜山良一 山 川 実 主計曹長 坂井辰之助 護送員二〇名。名の幾時名等は香港に百兵站病院に保管され、主力帰還時持参す。

(341)

1341

第二百兵站病院患者護送班略歴

年 月 日	概 要
昭二、三、一五	香港ヲ二百兵站病院長は左記人員を以て患者護送班を編成し飯田軍医大尉に指揮を命ず
	左記 將校 軍医將校 二、 衛生將校 一、 准士官下士官七 兵二 左の中才百三十六兵站病院よりヲ二百兵站病院へ 配属中の者 將校一、 准士官下士官三、 兵一ニを含む 輕症患者にして貨物船に依る輸送に堪え得る患者二〇名を指定し乗船前防 疫業務を開始す 前記二〇名の患者中肉係部隊の患者一七七名なり。 英回輸送船サンバナ一号に乗船 十時乗船を完了 十三時香港を出港す 航行 龍海中途者中に特記すべき者症増進を来たせる者を認めず。 鹿兒島に上陸す 上陸後海軍關係部隊患者二三名は海軍側の要求に依り海軍側に移管し、陸軍 部隊患者一七七名は鹿兒島國立病院に収容す 患者護送員は 將校二、准士官下士官三、夜務整理に残留し、他は隊隊召集 解除となり
一六、二〇	
一三、二〇	
一三、二七	
一三、二七	

外

南文

(302)

1342

特設工兵第八中隊略歴

陸軍大尉 前 田 義

年 月 日	概 要
昭一五、二二二 二、二六 二〇、三一八	<p>広東省広州市西村に於て特別才二十一飛行場設定隊を編成          編成完結（編成人員は分遣者のみによりて編成せるものなり）          軍令陸甲才十八号（波来参編才十七号）に基き特設工兵才八中隊を編成（編          成人員は一部の分遣のみ原隊復帰し其の交代よりて一部転属し来るも主力は          特別才二十一飛行場設定隊編成要員を以て編成す）</p>
三、三〇	<p>広東省清遠県牛皮頭に於て編成完結す</p>
昭一九 二、二六 二、二六 二、二六	<p>広東省番禺県黄村に於て黄浦飛行場を設定す          才二期相桂作戦（西江作戦）に参加</p>
二、二六 二、二六 二、二六	<p>広東省三水県三水 広西省蒼梧県梧州の間西江沿線に自動車道を構築</p>
二、二六 二、二六 二、二六	<p>広東省広州市に集結</p>
二、二六 二、二六 二、二六	<p>才三期湘桂作戦（粵漢線打通作戦）に参加</p>
二、二六 二、二六 二、二六	<p>広東省清遠県亞咀 広東省清遠県牛皮頭の間の粵漢線路盤復旧作業に従事</p>
三、一八 三、一八 三、一八	<p>広東省清遠県牛皮頭に於て特設工兵才八中隊を編成</p>
三、三〇	<p>編成完結</p>

(503)

1343

年 月 日	概 要	摘 要
昭二〇、八三、一四〇	広東省清遠県牛皮頭 広東省英徳県英徳市の間粵漢鐵路修復 田作業に從事	縮成完結時 総員一二八名
八一八	終戦に依り部隊広東省広州市兵結のため広東省英徳県英徳市 出発	死亡者 四名
八二四	広州市に集結	被属者 一名
二、一、一九 三、二〇	中国側協力作業とりて広東省高安県三州附近に於て要明十三 團独立作業団独立工兵隊とりて築堤作業に従事	現部隊に集結解除者六名 （居民として帰還したる）
三二八	内地帰還のため広州市出発 同日黄浦港集結	入院者 一一名
四一	黄浦港出発	（入院と同時に集結解除す）
四二	虎門出帆	生死不明者なし
四九	浦頭入港	処刑者 なし
五、六	浦頭上陸	残留者（現地）なし
五、一二	部隊復員縮成解散 復勢整理者官氏名	現在員一〇六名
	陸軍大尉 前田 義一 同 曹長 栗山 清	
	昭和二十一年五月十七日二日市に於て復員完結	

特設工兵隊第九中隊略歴

陸軍大尉 新村 太郎

年月日	概	要
昭三三 三二〇	<p>軍令陸甲才十八号（波集參置才十七号）に依り編成下令          広東省曲江県曲江に於て編成完結          編成定員二〇〇名（欠員七二名）編成完結時の人員一二八名          細部の内訳左の如し</p> <p>第八師団才八陸上輸卒隊 惣本曹長以下 六名          第九師団才二架橋材料中隊 木村軍曹以下 六名          独立輜重兵才十九中隊 鐘築中尉以下 六六名          南支那野戦兵器廠 土田軍曹 一名          南支那野戦自動車廠 新村大尉以下 三一名          独立工兵才五十九大隊 八木沢曹長以下 九名          独立歩兵才八二五大隊 赤坂准尉以下 二名          独立歩兵才一二六大隊 田村伍長以下 二名          才二十三軍司令部 横山主計少尉以下 二名          広東才一六〇兵站病院 岡部衛生上等兵以下 二名          広東才一八〇兵站病院 上山衛生軍曹 一名</p>	





昭二四一	四二	四九	五六	五二	五七	年月日	概
乗取	虎門出帆	浦賀入港	上陸	部隊連隊召集解除す	復員完結	兵力 一三八名	
						入院 一四名（広東にて入院三名）（浦賀久里浜病院入院十一名）	
						死亡者（戦死三名）（戦病死一名）	
						生死不明者 なし	
						処刑者 なし	
						残留者（現地）なし	
						編成以未事故者 一八名	
						現在員 一一〇名	
						編成定員二〇〇名中 欠員七二名は留守部隊より補充なし	

(307)

1347

# 第十三野戦輸送司令部略歴

陸軍少尉 角 和 善 助

年月日	概	要
昭八八三〇	縮成完結	
昭八八三〇	人員 将校十四名 下士官六名 兵十七名	
昭八八三〇	車輛 乗用車四輛 貨車二輛	
昭八八三〇	火器 部隊裝備用無し	
昭八八三〇	個人裝備 (軍刀五、三〇年式銃剣十八、三八式歩兵銃十七(実包五一〇))	
昭八八三〇	満州国府々哈爾 駐地	
昭八八三〇	支那派遣の爲有々哈爾出發	
昭八八三〇	相桂作戦に伴う輸送業務	
昭八八三〇	広東省韶関付近の警備	
昭八八三〇	広東省韶関出發	
昭八八三〇	広東到着	
昭八八三〇	歸國輸送の爲広東出發	
昭八八三〇	浦賀上陸 復員式終了	

夕の内 有

(308)

1348

独立自動車第三百三十一中隊略歴

陸軍大尉 塚本 健次郎

年 月 日	概 要
昭 和 一 九 二 一 一 〇	軍令陸甲才十五号に依り動員下令
四 六	戦車才十九連隊に於て編成完結
六 五 一 三 八	中支湖北省武昌
六 六 三 〇 〇	桂花樹
三 九 三 一 三 八	湖南省衡陽
六 三 三 〇 一	南支広東省坪石
七 一 二	韶関
二 一 四 九 七 八	広東
一 九 八 四 二 九	作戰
八 四 二 九	湘桂作戦才一期 長沙、衡陽攻陥戦参加
三 八 一 九	才二期 桂林、柳州攻陥戦参加
六 三 三 〇 二	粵漢線打通作戦参加
一 九 六 六 三 〇 〇	警備
二 〇 三 九 一 二 八	中支崇陽界桂林樹付近の警備 中支湖南省衡陽

(309)

1349

年 月 日	概	要
昭和 二〇、七 八、一五	南支広東省韶州附近の警備 停戦の大詔発せられ部隊將兵は悲憤其の極に達したるも益々団結を強固にし 難関克服の精神を堅持し以て聖慮に答え奉らんと 部隊は復員下令に対処 集結移動に協力し衆昌——韶州向の兵員並軍需資材の日夜 激なる輸送業務 に従事す 民衆は風に動搖し土匪の出没益々激しく行動益々不穏となり我が 周辺に未幾 々なるものを輩出し韶州以北諸部隊の集結を容易ならしめ 南支軍集結地広東に向い韶州を出発す。	
九 一 九 八	広東市民の罵声を浴び兵站宿舎に集結、後部隊は竜潭に仮泊するや直に隣接 諸部隊の軍需資材を輸送を實施し就中貨物廠隊貨集積には不眠不休にて協力 し。	
九 一〇	兵器（自動貨車）中国側移動の爲広東中山公園に於て車輛検査を受く、以後 は中国側より更めて自動貨車の借用を受け全車諸部隊の移動並に居留民引揚 に從事	
九 一四 九 一五	五車輛を残置したる外 同車二十七輛中国側に移談す 竜潭より大岡に集中營を移動し攜帶兵器、自動火器、自動貨車弾薬、藥品衛 生材料等を移談	
一〇、 一	石涌 地区に集中宿を移動す 此の同七年の長きに亘り軍政を實施し来りし市民は日本軍への信頼を捨て我	

外

行

年月日	概	要
昭 二〇 三・一 七〇	に投石及糧秣被服等の掠奪すら為す者尠からず。部隊は直に自給自足を目指し、地を削整し一意農耕に邁進し日量三五町の新収獲をあげ、副食の自給は概ね其の要を満せり 一方中国側の清掃其の他の作業に毀没するの外（延一三〇〇米）新編第一軍自動車修理廠 准尉以下一五名の自動車修理工を派遣 才五十四軍司令部 將校以下に五名操縦技能者を夫々派遣部隊の復員帰還日時切迫と共に再三交渉を重ねたる後、漸く彼等を復帰收容せり 帰還期の決定するや中国側の嚴重なる携行品の検査を受くる事二回、最少限の携行品を許可せらる。	
二〇 三・三 二九		
四二		
四八		
四一五 四二三		
	右涌口集中營出發 徒歩にて乘船地黃埔に向い 「ヤンマール」に依り「セカンドバール」に至り「Vリセ」トーマスハートレイ 男に移乗 一五時浦賀入港検査終了に伴い 上陸 米軍の検査終了後復員せり	

(3/1)

1351

独立自動車第三一二中隊略歴

陸軍大尉 久保 久夫  
陸軍中尉 松枝 富男

年月日	概	要
昭一九四、六	編成完結	
	編成人員 総員一三二名 内訳 将校五 准士官一 下士官一七 兵一〇九	
	編成兵器 小銃一〇四 拳銃一九 輕機三（増加装備） 彈藥小銃三一二〇発	
	輕機六〇〇〇発	
	車輛兵器 三九輛 内訳 指揮官車一 輕修理車二、自動貨車三五 側車一	
昭一九三一、五	軍令陸甲才一五に依り編成下令	
四六	兵庫県加東郡青野々原戦車才十九連隊に於て編成完結	
四八	屯営出発	
四二	中支派遣の属門司港出帆	
四一七	南京港上陸 支那派遣軍總司令官の隷下に入る	
四二五	蕪湖到着 船舶搭載業務	
六二	武昌到着 才十一軍司令官の隷下に入る 自動車輸送並湘桂作戦局地輸送	
八七	武昌出発	
九一〇	才六方面軍司令官の隷下に入る	
九一五	湖南省湘潭県中路鋪到着	

(374)

1352

年月日	概	要
昭二一四	自動車才三十七車隊長の指揮下に易洛河——衡陽間区間輸送並整備 中路鋪出發 独立工兵才三十八連隊長の指揮下に来陽——宜章間の道路補修 並輸送業務	
三二二	湖南広東省境通過才二十三軍司令官の隷下に入る。	
八三一	広東省坪石到着才十三野戦輸送司令官の指揮下に粵漢鉄道日府戦 詔州出發	
九一五	広東省軍需品の移管業務並中国側協力作業	
昭二一三	鳳天団より転属者二〇名転入す	
四八	黄浦港出帆	
四二三	浦賀港上陸	
	残務整理者官氏名	
	陸軍中尉 松坂富男	
	陸軍曹長 菅沼二三夫	

独立自動車第三百十三中隊略歴

陸軍大尉 延東徳大  
陸軍大尉 野中俊雄

年月日	概	要
昭九四六	軍令陸甲才 号により編成完結（除自動車三十五輛） 編成担任官 中部軍司令官	
	部隊 戦車才一九連隊補充隊 但し自動車三十五輛は昭和十九年四月二〇日南京自動車廠より受領 編成定員 一三五名（將校五 准士官下士官一八 兵一〇九） 編成兵器 小銃（三八騎銃）一〇七 拳銃（九四及一四年式）一八 自動車三十五輛 輕修理車一組 側車一輛 指揮官車一輛 支那派遣のため門司港出帆	
昭五四一	揚子江口通過	
四一六	才十一軍の戦斗序列に入り湘桂作戦に参加	
五一〇	武昌集結才四野戦鉄道司令部の指揮に入り甬石同地に在りて鉄道器材の輸送に任ず	
五二四	武昌集結才四野戦鉄道司令部の指揮に入り甬石同地に在りて鉄道器材の輸送に任ず	
九一三〇	武昌集結才四野戦鉄道司令部の指揮に入り甬石同地に在りて鉄道器材の輸送に任ず	
九一〇	才六方面軍の隷下に入り長沙付近に在りて軍需品輸送に任ず	
一〇一〇	才十三野戦輸送司令部の指揮に入り軍需品の輸送に任ず	

(3/4)

1354



年 月 日	概 要
昭 九 一 二 一 六	長沙出發衡陽に到り十二月八日才二十軍野戦貨物廠の指揮に入り、同地に在りて軍需品の輸送品に任ず
二 〇 三 一	再び才一三野戦輸送司令部の指揮に入る
三 二 〇	広東省 昌県坪石を中心として南部粵漢線打通作戦に参加
六 一 〇	才二十三軍の戦斗序列に編入さる
六 二 〇	曲江縣曲江に位置し韶州、南雄方面の輸送に任ず
八 一 四	曲江縣曲江に於て終戦
九 二	広東集結の為曲江出發
九 一 五	清遠縣派潭墟に於て自動貨車を自動廠に移管
九 一 二	広東に到着 同日兵器、被服糧秣及衛生材料の中國側接收を
二 一 〇	広東省広東河南集中營に入り 此の間中國側に協力者を出す
四 三	復員の為集中營出發
四 八	北黄浦よりV70に乗船
四 二 三	浦賀に上陸 復員式完了
五 三	復員完結

戦車第三師団防空隊第一中隊略歴

陸軍大佐 橋 見 策 馬

年月日	概	要
昭一七、一一一四	蒙疆巴拉盟包頭に於て編成完結	
昭一七、一一一四	(軍令陸甲第四大号に依る)	
昭一七、一一一四	より昭和十八年七月二日迄包頭付近の防空並警備に任ず。	
昭一七、一一一四	防空隊第一中隊は中隊長陸軍中尉矢野龍雄の指揮を以て転進の爲	
一八七二	包頭出發	
八二八	上海着	
九四	上海出帆	
九九	広東省広東に上陸 広東防空隊長陸軍大尉中田忠郎の指揮に入らりめられ	
一九三一	広東付近の防空に任ず	
二〇三二七	中隊長陸軍中尉矢野龍雄転任 陸軍大尉金子啓次着任	
六二四	広東防空隊長陸軍大尉中田忠郎の指揮を離れ広東地区防空隊長陸軍少佐飯田	
九二	美男の指揮に入らりめられ	
	才二十三軍司令官の隷下に入らりめられ 前任務を続行	
	停戦協定締結に至る	
	残務整理着官氏名	



# 鉄道第十五連隊第一大隊略歴

陸軍少佐 古川保範  
陸軍少佐 丹羽一衛

年月日	概	要
昭二九、二一〇	軍令陸甲才九号に依り鉄道連隊臨時編成下令(乙)せられ	
四一四	千葉県津田沼町鉄道才二連隊補充隊に於て編成開始	
四二四	編成を完結せり	
	連隊長 陸軍中佐 小田 永吉	
	才一大隊長 陸軍少佐 丹羽 一衛	
	才二 陸軍大尉 川 西 要	
	才三 陸軍大尉 国 松 英	
	材料廠長 陸軍大尉 佐々木 鶴吉	
	丹羽少佐	
昭二九、四二九	本營(津田沼)出發	
五一	博多港出帆	
五一	釜山港上陸	
五三	鮮満洲境に於て一泊	
五五	満支國境(小倉附近)通過	
五八	中支支線省縣陽泉驛降着	

外

年月日	概要	要
昭和五 九 七 四	津浦線鉄道建設並付近の警備 連隊主力と離れ南支戦進の為 揮下に入り海南線 久津浦線の鉄道運輸業務に従事（祐淡江） （連隊主力と共に淮南線の撤収作業に従事） 南支戦進の為吳淞港出発 （同 右） 広東省花県新街着 （湘桂作戦（柳州）才二期参加） 南部粵漢線新街——源潭墟間 鉄道敷設及運輸業務に従事 南部粵漢線玄州市——源潭墟間及玄九線の運輸、輸送業務並に復旧作業 南部粵漢線源潭墟——部州間路盤構築及架橋作業 玄九線撤収等諸業務に従事 才二十三軍の隷下に編入 南部粵漢線玄州市——源潭墟間及玄九線運輸業務及中國側移管準備業務 に従事 中河側引続完了 集中官集結 内地帰還の為黄浦出發 浦賀港上陸	
五 六		

(3/7)

1359

	年 月 日
	昭二五二二 復員完結 概 要

(320)

1360

野戦電信第三中隊略歴

年月日	概	要
昭三三七一三	編成	
七一〇	編成地 東京中野 電信才一連隊	
一五八二三	野戦電信才三中隊は電信才一連隊に於て編成を完結し上海上陸と共に才三方	
八二五	面軍通信隊長の隷下に入る。	
八二三	野戦電信才三中隊は軍令陸甲才十五号に依る編成改正に伴い	
	漢口に於て編成を完結し	
	以降才十一軍通信隊長(電信才十三連隊長)の隷下に入る。	
昭三三三三	昭和十三年七月十三日(渡支年月日)	渡支当初駐屯地 上海
昭三三七一三	野戦電信才三中隊は寧波港出発	
七二八	上海に上陸 爾来才三方面軍通信隊長の隷下に在りて除州会戦・武漢攻略戦	
八二三	南昌攻略戦、襄東作戦 宜昌作戦及武漢地区に於ける警備通信勤務に参加す	
	軍令陸甲才十五号に依る編成改正に伴い同日以再才十一軍通信隊長(電信才	
	十三連隊長)の隷下に在りて武漢地区に於ける警備通信勤務及予南作戦、長	
	沙作戦、才二次長沙作戦、折章作戦、江北殲滅作戦、江南殲滅作戦、常德殲	
	滅作戦、湘桂作戦に参加す	

(321)

1361

年月日	概	要
昭二〇、一	以降才二十軍の隷下に入ると共に電信才五連隊長の指揮に入り、同日より、南部粵漢線打通作戦に参加す	
二、一	才二十三軍の隷下に入ると共に、同日以降電信才十四連隊長の指揮に入り、又、香港總督の隷下に入ると共に香港防衛、隊長の指揮に入り、広東付近及広九鉄道沿線地区に於ける警備通信勤務に任ず、	
三、一	停戦に伴い、中隊主力は	
八、一〇	九竜収容所に押留（一部は前記作戦行動中に於て他部隊に転属、臨時死傷及物件監視の爲湖南省長沙に於て電信第十三連隊に殘置せる者、入院患者、死没者等あり）せられ以て	
八、一四	内地帰還の爲香港出發	
九、一六	鹿兒島に上陸し、其の大部は上陸	
二、一、二九	同日復員	
二、五	中隊長以下三名は爾後福岡県二日市支那派遣軍連絡所に於て残務整理を實施し業務完了と共に同年三月末復員す。	

(322)

1362



電信第一四連隊三部略歴

山 木 喜 太 郎

年 月 日	概 要
昭二〇、八一五	終戦に伴い九竜地区に行動中の電信才十四連隊の一部及同地兵站病院に入院 加療中より着にりて退院患者は逐次同地深水渉収容所に収容と共に爾来野 戦電信才三中隊長山木大尉の指揮下に入り、次いで、
二、一、二九	内地帰還に伴い陸軍軍曹別所民造以下三四名は野戦電信才三中隊主力と共に 輸送指揮官香港砲兵隊茅根大尉の指揮を受け、同日香港出発
二、五	鹿児島に上陸、別紙除隊召集解除者名簿の通り復員す
二、七	陸軍衛生一等兵安田喜助は昭和二十一年二月一日内地帰還に伴い船舶工兵才 三十四連隊輸送指揮官中根少佐の指揮を受け同日香港出発
	鹿児島に上陸、同日復員す
	陸軍上等兵三浦稻次郎以下五名は昭和二十一年二月四日内地帰還に伴い独立 歩兵才六十九大隊輸送指揮官足羽大尉の指揮を受け同日香港出発 二月十日 鹿児島に上陸同日復員す。(人名は除隊召集解除者連名簿参照)
	兵力 下士官三名 兵三七名 計四〇名
	残務整理者
	才二十三号、野戦電信才二中隊 山木喜太郎大尉

(223)

1363

船舶砲兵団司令部付略歴

山 木 喜 太 郎

年 月 日	概 要
昭二、八一五	終戦に伴い九龍地区に行動中の船舶砲兵団司令部付米田軍尉少尉は同地深水渉収容所に収容と共に爾来軍通部隊付として衛生業務に従事す。而して
二、一、二九	内地帰還に伴い該軍は軍通部隊主力と共に輸送指揮官香港砲兵隊茅根大尉の指揮を受け 同日香港出發
二、五	鹿児島に上陸 同日復員す。
	残務整理者 才二十三軍 野戦砲信才二十隊長 山木喜太郎大尉

(324)

1364

野戦電信第三中隊略歴

年月日	概	要
昭三 三七	野戦電信才三中隊は電信才一連隊に於て縮成を完結す。	
三七	野戦電信才三中隊は内地港灣出發、同月上海に上陸、爾來才三方面軍通信隊長の隷下に在りて徐州會戰武漢攻略戰、南昌攻略戰、襄東作戰、宜昌作戰及武漢地区に於ける警備通信勤務に参加す。	
一五 八二三	軍令陸甲才十五号に依る縮成改正に伴い同日以降才十一軍通信隊長の隷下に在りて武漢地区に於ける警備通信勤務及予南作戰、長沙作戰才二次長沙作戰	
二〇 一一	浙作戰、江北殲滅作戰、江南殲滅作戰、常德殲滅作戰、湘桂作戰に参加す	
二一 二八	以降才二十軍の隷下に入ると共に電信才五連隊長の指揮に入り、	
三一 一	南部粵漢線打通作戰に参加す	
三八 一	才二十三軍の隷下に入ると共に同日以降電信才十四連隊長の指揮に入り、又	
八 一〇	香港總督の隷下に入ると共に香港防衛隊長の指揮に入り、廣東付近及広九鉄道	
八一 四	沿線地区に於ける警備、通信勤務に任ず、	
九 一六	停戦詔書發布終戦に伴い中隊主力は	
	九竜收容所に抑留せられ、又中隊の一部は前項作戰行動中に於て他部隊に転属、或は配属し或は中隊の湘桂作戰参加に伴い残置物件監視の爲武漢地区に	

(325)

1365

年 月 日	総	要
<p>           残置し又作戦行動向に於て入院患者及死没者等と出せり。            編成人員            野戦電信才三中隊の編成定員は將校以下二九三名なるも戦局の情勢に伴い、            漸次累加し昭和十九年一月一日以降終戦当時迄に於ける総人員は將校以下、            四七八名にして終戦に伴う中隊復員當時に於ける人員内訳状況次の如し            人員内 訳            内地帰還復員せる者（三六七名）            中隊主力中隊長以下二五三名は香港砲兵隊才根大尉の指揮を受け昭和二十            一年一月二十九日香港出發二月五日鹿児島に上陸其の大部は上陸同日            復員し中隊長以下三名は爾後残務整理に従事し業務完了と共に夫々復員            す。            下士官以下三名は船舶工兵才三十四連隊山根少佐の指揮を受け昭和二十            一年二月一日香港出發 二月七日鹿児島に上陸同日夫々復員す。            將校以下十一名は独立歩兵才六十九大隊足羽大尉の指揮を受け昭和二十            一年二月四日香港出發二月十日鹿児島に上陸同日夫々復員す。            入院患者（二九名）            中隊主力復員當時に於ける入院患者は二九名にして内地還送後退院復員            せる者次の如し         </p>		

年 月 日	概 要
<p>兵二名昭和二十年十二月六日九龍才二百兵站病院に半部（香港）出発 十二月十四日鹿児島に上陸同日退隊 同日復員す</p> <p>将校一 兵二名昭和二十一年二月二十日九龍才二百兵站病院に半部（ 香港）出発 二月二十六日鹿児島に上陸 同日復員す</p> <p>残留者（一〇八名）</p> <p>将校以下七六名は昭和十九年七月十五日広東に於て電信才十四連隊に焼 時配属す、</p> <p>下士官以下三二名は昭和二十一年九月十六日終戦に伴い九龍收容所に抑 留せられ同所に抑留中</p> <p>所在不明者（六名）</p> <p>衛生部下士官一名電信才十三連隊（当時桂林付近を行動中）に戦属の為 昭和二十年七月十日広東出発す。</p> <p>兵長二名 昭和十八年度下士官候補者教育の為昭和二十年三月十日広東 出発南京教育隊に向う。</p> <p>衛生部兵長一名 昭和十八年度現役衛生部下士官候補者教育の為 昭和 二十年三月十日広東出発 南京教育隊に向う。</p> <p>兵長一 昭和十七年八月十五日 憲法候補者として、漢口に於て憲兵漢 口隊に分遣す</p>	

(377)

1367

年月日	概要
	<p>兵長一 昭和十九年五月十六日以降 物件監視の爲 電信才十三連隊小林大尉の指揮に入り長沙に残置す</p> <p>裁 属 者 (三二名)</p> <p>幹部候補生一名 陸軍通信学校に教育分置中同校に於て昭和十九年十一月二十九日中央特殊情報部に転属す。</p> <p>兵二五名 昭和二十年三月三十一日湖南省衡陽に於て才五通信隊に転属す。</p> <p>経理部 下士官一名 昭和二十年三月一日広西省桂林に於て才十一軍野戦貨物廠に転属す</p> <p>兵五名入院患者とりて内地醫送上陸同時電信才一連隊補充隊に転属す</p> <p>死 没 者 (三六名)</p> <p>昭和十九年一月一日以降に於ける死没者は三六名なり</p>